

薬師堂遺跡

個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

例　　言

- 1 本書は個人住宅建設に伴う薬師堂遺跡(長野県上水内郡飯綱町大字黒川字薬師堂)の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、国庫補助事業「町内遺跡（猪堀等）」として、飯綱町教育委員会が平成26年度に実施した。
- 3 発掘調査の測量は簡易測り方実測法で実施した。基準となる国家座標（世界座標系2011）の設置は、（株）共栄測量社に委託した。
- 4 本書で使用した地図は国土地理院発行地形図（1：25000）、牟礼村作成の牟礼都市計画基本図（1：2500）である。
- 5 報告書作成に係る作業及び編集は主として小柳がおこない、遺構図整理、レイアウト・トレースは富岡鹿子が分担した。
- 6 発掘の記録と出土遺物は飯綱町教育委員会で保管している。
- 7 土地所有者の上野孝信氏と施工業者の田中建設株式会社には、ご理解とご協力をいただき感謝申し上げる。

凡　　例

- 1 遺跡名は「薬師堂遺跡」とし、遺跡記号は「YD」とした。
- 2 遺構記号は以下のとおりとした。
SK：土坑、SX：性格不明な遺構、P：ピット（小穴）
- 3 遺構・遺物実測図等の縮尺はそれぞれ図にしめた。

目 次

例言

凡例

目次

第1章 調査の概要	2
第1節 調査に至る経過	2
1 調査の目的と調査に至る経過	2
2 調査体制	2
3 地区割りと調査方法	2
4 調査日記抄	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺構と遺物	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構と遺物	7
1 性格不明な遺構	7
2 土坑	9
3 ピット	10
4 遺構外出土の遺物	10
第4章 成果と課題	10
引用・参考文献	11
写真図版	12
報告書抄録	13

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

1 調査の目的と調査に至る経過

薬師堂遺跡(姫路市大字黒川)の範囲に含まれる地点で個人住宅建設が予定されたため、事前に保護協議を行った。遺物包含層の確保が困難と判断し、記録保存を目的とする発掘調査を実施するに至ったものである。予定地には建物が建っており、その取り壊しを待つ調査を実施した。

2 調査体制

調査主体者	姫路町教育委員会教育長	寺島 政次
事務局	教育次長	早川ひさ子
	生涯学習係 係長	土屋 正康
	主幹	小山 丈夫
	主査	大川 明美
発掘調査団	団長 (いいづな歴史ふれあい館長)	小柳 義男
	調査員	横山かよ子
	作業員	鈴木 千秋
		富岡 鹿子

3 地区割りと調査方法

測量の業者委託の関係等から、測量基準点（世界座標系2011）の設置が遅れることとなったが、調査範囲が狭い（ほぼ5・5m×5m）ので、遺物は遺構ごと・出土層位ごとに取り上げ、主要遺物は出土地点を記録した。レベルは隣地との境界杭に設定し、遺構等の断面図作成の基準とした。

測量基準点は世界座標系（2011）によって以下の3点を設置した。（M1：X座標82978.000、Y座標-24946.000 M2：X座標82974.000、Y座標-24946.000 M3：X座標82978.000、Y座標-24950.000）。M1は北緯36度44分40.01579秒、東経138度13分25.54927秒になる（註1）。同時に使用レベルの数値を確認（標高540.007m）した後、簡易造り方による全体実測を行った。

4 調査日記抄

- 11月21日（金） 住宅建設地にあった建物の取り壊しにあわせ、地下の状況を確認。重機で用地西端にトレーナーを入れていく（幅70cm、長さ6m）。柱穴状のピット（P 1～3）及び土坑（S K 1）を検出。須恵器・土師器の破片も出土したため、調査範囲を広げることとする。廃土場所も考慮して調査範囲を決め、表土等を重機ではぐ。今後の廃土量も勘案して土砂の搬出も同時に行う。
- 11月25日（火） 調査地内の遺構確認。新たに1つのピット（P 6）と大きな黒い落ち込み（S X 1）を確認。S K 1発掘。S X 1を掘り始める。
- 11月27日（木） S X 1の南東隅にはトイレが埋め込まれているとのことで、西側半分にしづらって掘っていく。炭を多く含み、やわらかく掘りやすい土。S X 1内にS X 2を検出。廻りを粘土（厚さ10cmほど）で縁取った円形の遺構。内部を2分して南側を掘る。黒くつやのある土。サクサクして掘りやすい。粘土に礫の跡が2本確認でき

- る。最下部の木片の上から鉄製品が出土。調査範囲全体を精査し新たにピット（P 4・5）を確認
- 11月28日（金） SX 2 の南半分を掘り割る。SX 1 を円形に掘り込み、その底に粘土を敷いてから木桶を置き、木桶と掘り込みの間に粘土を詰めて仕上げている様子が観察できる。SX 2 の実測。その後 SX 1 を掘り進める。底部附近より磁器の碗（広東碗）が出土。SX 1 の断面図作成。
- 12月1日（月） 共栄測量設計社によって基準点を設置。遺構全体図、調査地西端の断面図作成。遺構全体写真の撮影。
- 12月2日（火） 圆面やレベルを確認。埋戻し後、撤収。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

飯綱町は、日本海に面する新潟県の高田平野と長野盆地を結ぶ途上にあり、日本海までは約50kmの距離である。古くから信濃と越後を結ぶ交通の要衝に位置しており、古代の官道である東山道から分かれ、越後国府（上越付近）に至る東山道の支道や、江戸時代初期に整備された北国街道が通っていた。

飯綱町からは、北信濃において北信五岳の名で親しまれている飯綱山（飯綱山）、戸隠山、黒姫山、妙高山、斑尾山を一望できる。町域の西部には飯綱山、北部には斑尾山の山麓が広がる。五岳の西端に位置する飯綱山は起伏を繰り返しながら東へと振野を広げ、その末端部分に大字黒川が立地している。

遺跡は、流沢川と八蛇川に挟まれた小高い丘陵上に位置する。大字黒川の一带は、ともに飯綱山を源流とする流沢川と八蛇川などの浸食により「七沢八谷」とよばれる（清水1960）ほど沢（谷）の入り組んだ地形となっていた。

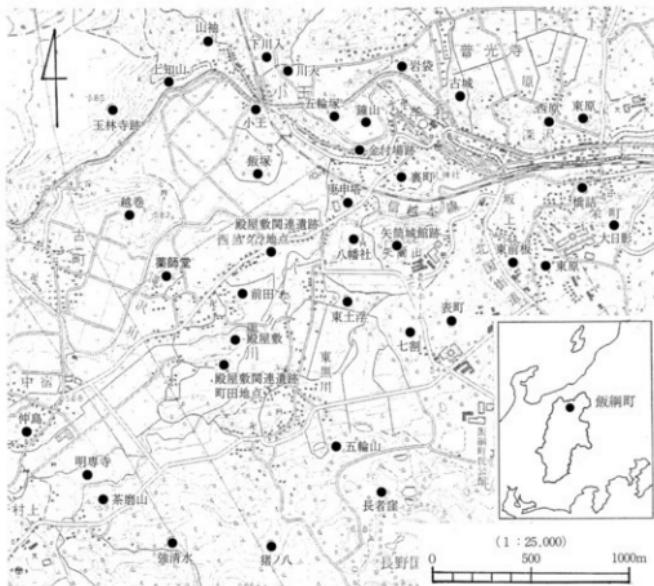
地質的には、飯綱山の火山活動に伴う牟礼岩屑なだれ堆積物と、それを覆う形で堆積した牟礼層とよばれる湖沼堆積物上に立地する。飯綱山の火山は約34万年前に始まり、途中休止期をはさんで約19万年前頃再び活動が活発化した。最後の噴火は約6万年前とされている。牟礼岩屑なだれ堆積物は、この間の火山活動に伴って堆積したものである。その上に堆積した牟礼層は、火山噴出物によって鳥居川の峡谷が堰き止められ、一帯が湖と化した時期に形成されたものである。牟礼層の堆積時期については、同時期形成とされる野尻湖層の¹⁴C年代値や長野県埋蔵文化財センターが調査した麥町遺跡の牟礼層の¹⁴C年代値から、約2～4万年前頃と考えられている（中野2009）。

第2節 歴史的環境

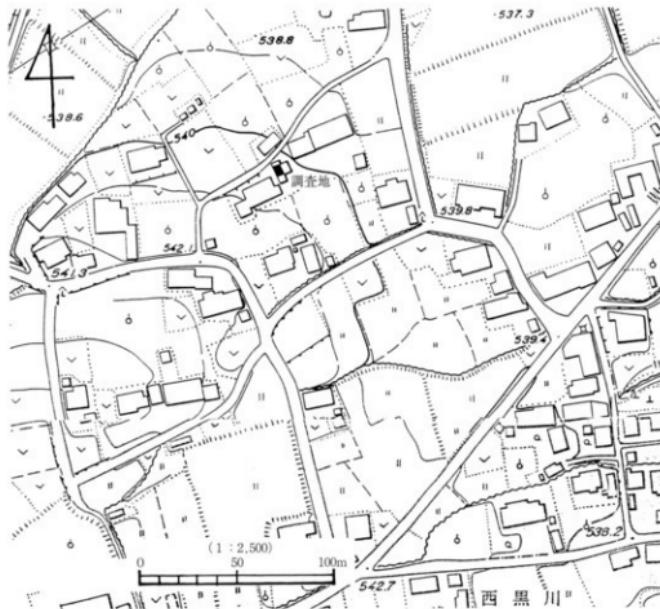
「黒川」の初出は、嘉暦4年（1329）にさかのほる古くからの村落である。諏訪社上社五月会御射山頭役等の納替を定めた諏訪幕府下知状案（守護文書）に、「（十番五月）會分 黒河 福王子 長治（長沼） 下浅野郷疊後左京進入道跡」と記されている。『信濃史料』によれば疊後左京進入道は、峰津宗久である（信濃史料刊行会1954）。

ちなみに、同書には普光寺（福王子）のほかに、倉井、赤塙、小玉、野村（現野村上）の現在町内の大字となっている地名も記されている。

天正10年（1582）7月13日、上杉景勝が島津淡路守（忠直）に与えた「地方之覚」に記された町内の所領は以下の通りである（上越市史2004）。



第1図 遺構周辺図



第2図 遺跡位置図

百貫文平出、千貫文黒川郷、五百貫文牛札、參百貫文野村、參百貫文小玉、七百貫文福王子、參百貫文倉井、七百貫文赤塙

ここに記されたように、黒川は町内では耕地の広い大きな集落であった。

黒川には殿屋敷の字地があり、当地の在地領主（矢筒城主）島津権六郎の屋敷跡と伝承されている。

殿屋敷周辺には大町、中町、前田などの字地も存在している。字前田には、大永2年（1522）矢筒城主島津権六郎が伯母の菩提のために建てたといわれる淨土宗玉林山長谷寺がある。同寺裏の墓地に所在した五輪塔の地輪には「妙相院寶資玉林大権尼 大永二年三月朔日」と銘が刻まれていた（矢野1997）。同寺には、天徳のころ真言宗高野山の僧が普光寺に参詣の折、本村に草庵を結び、天徳3年（959）寺堂を建立し玉林山般若音寺と号したとの伝承がある。境内から発掘されたという古墓石に刻まれた梵字の傍らに、天徳4年の銘が刻まれていたといふ記録もみえる（信濃教育会上水内部会1924）。

昭和55年に調査された前田遺跡（字北の台）からは、平安時代後期の竪穴住居址4棟、土壙11基、溝址、配列ピット（掘立柱建物址）、ピット群等が検出されており、「莊園の中心的な拠点」と考えられている（鳥田1981）。

また、島津権六郎が城主であったと伝わる矢筒城周辺では、6次にわたる矢筒城館跡の調査や、城下町があつたと伝わる表町遺跡の調査が行われ大きな成果をあげている。

矢筒城館跡では、これまで試掘を含め6次の發掘調査が実施されている。1次調査では館跡と推測される地域を調査した。トレチによる調査で全体像はつかめなかつたが、平安時代にさかのばる掘立柱建物跡やピット群、石列等が検出されている。遺物は平安時代の須恵器、土師器から14世紀から15世紀を中心とする珠洲焼（大甕）、土師質土器（カワラケ）、陶器、茶臼、石臼等が出土している。ことに、茶臼の破片の多いことに注意が向けられている（牟礼村教育委員会1981）。

2次調査では内堀の一部が調査された。幅9～12mにおよぶ堀で、深さは堀の外側に盛られた土壙状の上部から3.5mになる大規模なものであった（牟礼村教育委員会1988）。

4次調査では、1次調査で発掘できなかつた範囲の一部を調査している。数多くの柱穴と少なくとも4棟の掘立柱建物が検出されている。遺物は中世の内耳鏡、カワラケ、陶器などが出土している（横山2011）。報告書未刊。

6次調査は、個人住宅の建設に伴う小規模なものであったが、城の東側にも中世の土坑及びピット群を確認しており、城館跡や町屋の広がりを知る新たな手がかりを得ている（横山2011）。

付近には、永正4年（1507）の銘を持つ石造地蔵があり、「全国的にも類例の少ない、造立年代の明らかな石龕に入っており、中世における石造地蔵の基準作として貴重である。銘文から「本阿弥陀仏」なる者が両親の供養のために造立したことが明らかで、「本阿弥陀仏」という時宗（浄土宗の一派）に関わる造立者名があることは、時宗系統の浄土信仰が中世にこの地域にまで及んでいたことを示し、信濃における民衆の信仰を考える歴史資料としても大事である」として長野県宝に指定されている（飯綱町教育委員会2004）。

県道長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う発掘調査が、平成17年から19年までの3か年実施され、南北約350mにわたる15世紀後半から16世紀前半の大集落が確認された。集落は掘立柱建物や井戸跡など居住域を示すものばかりで、墓と思われる遺構は確認されていない。

最も戦国期の遺構が集中していたのは矢筒城館跡に近い北部で、大型掘立建物群や東西に走る溝跡、超大型の竪穴状遺構が軸を東南あるいは南北にそろえてならんでいた。配置された大型建物群などの状況から矢筒城館跡に関係する施設や建物が集まっていた可能性を指摘している。中央部付近は小規模な建物が多く、臼や曲物などの出土遺物とあわせ生活・居住の場と考えられている。南部からはそり・曲物・漆塗などが出土した井戸跡や小規模の建物跡の他、鍛冶滓や羽口などの鍛冶関連遺物がみつかった溝跡が確認されている。付近に鍛冶工房など

の作業場の存在を想定している。大規模な調査によって、場所によって異なる土地利用がされていた状況を示したことは貴重な成果であった（中野2009）。

飯綱町による表町遺跡の調査では、矢筒城（山城）の南側台地に存在していたと伝承される城下「表町」の、上水施設（井戸跡、貯水施設）や銀冶工房を検出し、「町」の構成の一部を明らかにした。また、梅瓶や水注などの輸入陶磁器や和鏡、馬具（馬具の帶金具の一部である鞍穴に取り付けた青銅金具）などの戚信財の検出から、山城と一体となる以前の先行する居館が調査地周辺にあり、14世紀後半に存在していた可能性を指摘している（笠澤ほか2014）。これまで表町遺跡は15世紀後半から16世紀前半とする指摘がされていた（中野2009）だけに、新たな課題が生じたことになる。

薬師堂遺跡は飯綱町大字黒川の字反町、字薬師堂にかけて広がる遺跡である。薬師堂遺跡が最初に紹介されたのは、遺跡の南に位置する前田遺跡の報告書である。井沢信雄が作成した「周辺遺跡分布図」の中に新発見遺跡の一つとして薬師堂遺跡に該当する地点が記されている（井沢1981）。残念なことに、どんな遺物が採集されたのか不明である。また、遺跡ながら同図の新発見遺跡はその後の牟礼村遺跡分布図に反映されず、広く周知されたのは、平成9年～11年にかけて実施された牟礼村遺跡詳細分布調査によって再確認された後であった。報告書（牟礼村教委2000）によると、土師器・須恵器・陶器が表採されている。これまで、同遺跡の調査が実施されたことはない。

字薬師堂は、その名の通り薬師堂があったことに由来するものと思われるが、その由緒等の伝承は現在伝わっていない。天保14年（1843）9月の「黒川村両組縫図面」に「字薬師堂（細）」と記載されるのが確認できる最も古い記録と思われる。

『中郷村史』（清水1960）には、「返町の西に薬師堂の地名がある。昔は薬師堂があったが櫛川の洪水の折流失したとか附近から足利期の金仏（十一面觀音）が出土したとの説もある」と記している。

この十一面觀音像について、牟礼村蔵では以下のように記述している（田幸1997）。

製作年代 室町時代後半

品質構造 銅製、鋳造、二范合型

法 量 総高 五・三センチメートル

像高 四・一センチメートル

本像は、二范合型による鋳造で、合わせ目のバリがよく削り取られ仕上がりがよい。しかし火中しているため肌の荒れが目立つ。

像容は頭頂に仏面を戴き、天冠台周間に、小さく化仏を刻むが、面貌は鋳出されていない。天冠台は紐一条で簡素な鋳出である。また髪際は素地で毛筋を刻まない。顔立ちは丸顔で頬が張り、わずかに見とれる目鼻や口もとに、やさしい表情がうかがえる。体部は両肩に天衣を懸け、条帛、二重折り返しの裳を着し台座に立つ（後略）。

薬師堂との関連は不明であるが、こうした出土品が伝承されていることも注意しておきたい。

第3章 遺構と遺物

第1節 基本層序

住宅が建設されていた関係で、表層が擾乱されたりして必ずしも良好な状態ではなかったが、おおむね以下のような層序を示す。

- I 表層（耕作土）：（欠陥）
- II 茶褐色土
- III 炭混じり黒褐色土
- IV ローム混じり褐色土
- V 黄褐色粘質層（ローム層）
- VI 灰白色粘質土

Ⅱ層上部から基盤層となる黄褐色粘質層（ローム層）上部までは浅く、全体で25cm～30cmほどの堆積があるだけである。

第2節 遺構と遺物

1 性格不明な遺構（第3図）

S X 1～V層へのⅢ層の落ち込みとして検出した。調査坑の南側および東側に広がる大きな落ち込みである。全体の形や正確な大きさはつかめないが、およそ隅方形をした長さ6～7m、深さ1mほどの大きな土坑となるものと思われる。

遺構はV層を掘りぬき下部はⅣ層に達しており、深さは1mほどのなる。下部は周りから流入した土が堆積している。そのくば地に、炭を多く含む黒褐色土層と炭混じりの黒色土層（基本層序のⅢ層）が厚く堆積している。

S X 1 出土の遺物（第4図2～4）

・平安時代の遺物

土器類12点（壺・甕）、内黒土器4点（壺）、須恵器4点（壺）出土している。いずれも小破片で図示できないが、おおむね9世紀代のものと思われる。

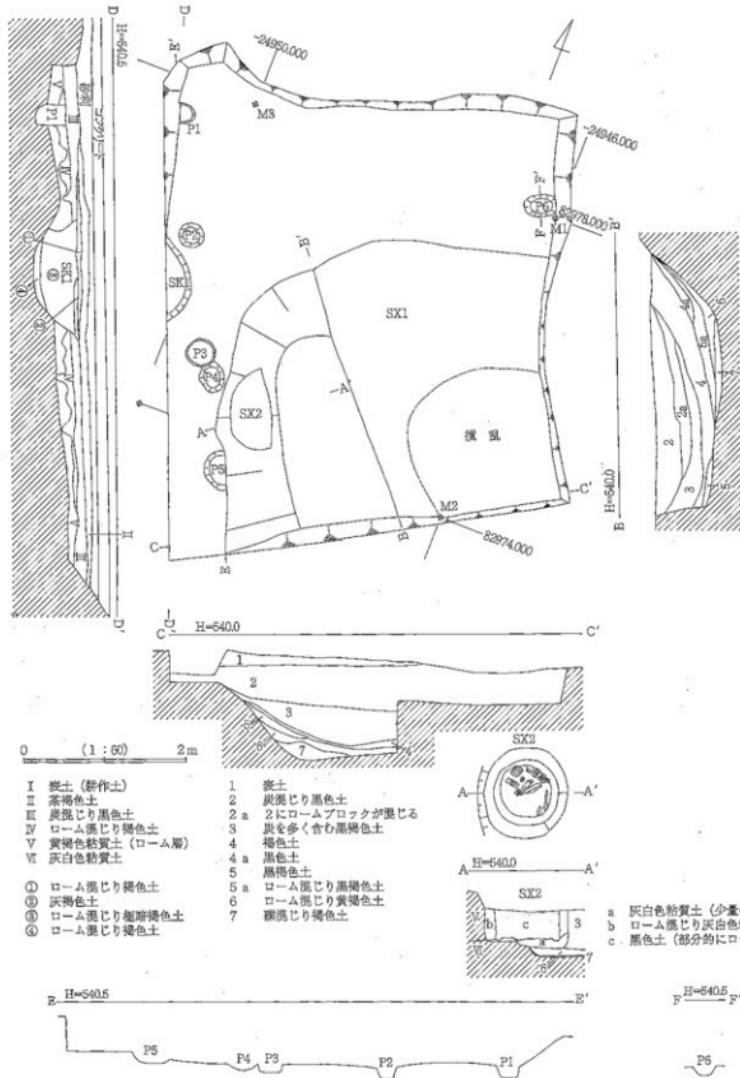
・近世（近代）の遺物

磁器 広東碗（第4図2）、碗、火入れ（あるいは番炉）などが11点出土している。ほとんど小破片で図示できないが、おおむね18世紀後半から19世紀前半のものである（註2）。

広東碗は、底径6cm。高台が1.6cmと高い。表面の紋様は青の染付で、「2条の波形－1条の直線－2条の直線内を太めの筆で描める－1条の直線」を繰り返しているようである。高台脇にも細い一重の囲線が施されている。囲線が先に施されたようにみえる。見込みには井桁状の紋様が施され、細い一重の囲線が回る。他の資料を参考にすれば、口縁下の内側にも二重の囲線が施されていたようである。大橋繩年のV期（1780～1810）にあたる肥前系（伊万里）の製品と思われる（九州近世陶磁学会2000）。

本碗と非常に類似したものが、広島県廿日市町遺跡、五反田遺跡、青谷1号遺跡で出土している（福原2007）。量産品であったことを示すものであろう。

陶器 甕1点（第4図3）、碗3点が出土している。碗は小破片で図示できないが、肥前系のものと信楽系の



第3図 造林図

ものがある。

蓋は径6.2cm。表面は鉄釉を施してある。裏側（底部）は糸切跡がそのまま残る。煙火具かとも考えたが、縁の反りがほとんどないので蓋として使用されたものであろう。

石硯（第4図4） 小型の石硯の破片である。海の部分は欠損している。陸の部分には、使用の跡を示す、すぐれがみられる。

古鏡 寛永通宝が1点出土している。

S X 2 S X 1 を検出していく過程で、S X 1 内に幅10~15cmの白粘土が環状にまわっている遺構を確認し、S X 2とした。S X 2は、S X 1内をほぼ円形（105~115cm）に、深さ48cmほど掘り込んでいる。このときS X 1の西壁の一部を壊している。

S X 2 の内側は径80cm、深さ35cmほどの黒くつやのある土が堆積しており、部分的に黄褐色粘質土が混じる。底部には板状の木片が残り、底部の木片上からは鉄製品が出土している。

環状の白粘土には、木桶の存在を示す兼状の圧痕が二条確認できた。白粘土は底部を含め木桶の周囲を取り巻くように施されていた。底部は上面が平らになるようにいくぶんロームの混じる灰白色粘質土（白粘土）を敷いている（5~12cm）。東側が幾分深く掘られていた分、粘土が厚くなっている。また掘り方にそったものか周囲を高く盛り上げるように粘土を敷いている。この後木桶を据え、木桶と掘り方の間に、植物質の纖維状の物を含むローム混じりの灰白色粘質土を詰めて仕上げたものようである。

類似した遺構は表町遺跡でも2基検出されており、肥溜と想定されている（笠澤ほか2014）。径85~90cmある2基が20cm間隔で併置されていた。S X 01は底板だけであったが、S X 02は、底板のみならず、「竹のタガで固定された側板が残っており、さらに側板外周は10cm幅を白粘土で貼付していた」。

大きさや木桶の上部に幅10cmの白粘土が環状にまわっている状況が類似しており、同じ用途であったことを思われる。S X 02の白粘土は木桶の下部および底部にまでは及んでいない（註3）。その点、本遺構はより丁寧に作られている。時間差を示すものなのか類例を待ちたい。

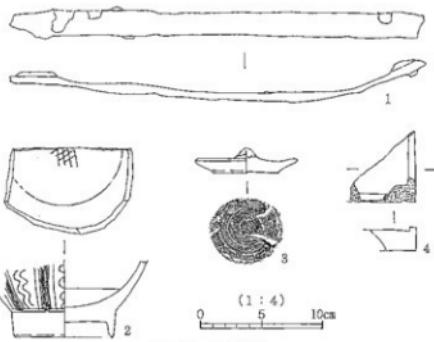
肥溜の調査例は各地にみられる。県内においても富士見町や長野市で調査されている。富士見町御柱尾根遺跡では、「下肥の漏洩を防ぐため、蓋と底に、石灰と粘土を混ぜたもので塗り固められている」肥溜穴が調査されている（小松1998）。長野市水内坐一元神社遺跡からは、肥溜が6基ならんで検出されている（青木・遠藤2010）。

S X 2 出土の遺物（第4図1）

鉄製品 底板の直上で検出した。長さ25.3cm、幅1.4cm、厚さ4mm程の板状の鉄製品である。錆に覆われており本来の曲りであるのか不明であるが、一端が反る形を示している。図示しなかつたが、同一製品の破片と思われる鉄片も出土している（註4）。

2 土坑（第3図）

S K 1 試掘の際、V層上面で確認した。調査地の西側に広がり、全体の形や大きさがつかめないが、Ⅲ層から掘り込まれていた状況が西壁の断面で確認することができる。掘り込み面での長さは145cm、深さは55cmに及



第4図 出土遺物

んでいる。内部は、ロームブロック混じりの極暗褐色土（③）が主として堆積し、その下にロームを多く含む極暗褐色土（④）が薄く堆積している。

遺物は検出されていないが、P1より上層から掘り込まれていることが西壁の断面から確認でき、P1より後の遺構と思われる。

3 ピット（第3図）

P1 試掘の際、調査地西北隅でV層上面に確認した。半分ほどは調査地外に広がっている。確認したV層上面では、径27cmほどあり、深さは17cmになる。しかし、西壁の断面からIV層から掘り込まれていることが確認でき、その深さは38cmに及んでいることがわかった。

P1出土の遺物 小破片で図示できないが、土師器（坏）の破片が1点出土している。また、釘状の鉄製品が1点出土している。

P2 試掘の際V層上面で確認した。V層上面で径32cmほどあり、深さは16cmほどになる。

P3 試掘の際V層上面で確認した。V層上面で径37cmほどあり、深さは11cmほどになる。

P4 V層上面で確認した。V層上面で径40cmほどあり、深さは10cmほどになる。北西方向の一部が、P3によって切られている。

P5 V層上面で確認した。V層上面で径50cmほどあり、深さは15cmほどになる。東側の半分ほどはSX1によって切られている。

P6 V層上面で確認した。V層上面で径40cmほどあり、深さは15cmほどになる。

各ピットの埋土は黒褐色土で共通している。このうちP1、P2、P3、P5のピットは、芯々が150cmの間隔で並ぶ。同一建物の柱穴であった可能性を考えたい。ただP5の底面レベルは、P2の底面レベルより22cmも高いのでP1、P2、P3の三ヶ所を一連のものと考えるのがよいのかもしれない。いずれにしても建物は、調査地の西側に広がることが想定される。

明確な時期を特定することは難しいが、P1内から土師器片が出土していることや調査地内からも須恵器・土師器・黒色土器の破片が出土していることを考え合わせ、平安期にさかのばる可能性も考えておきたい。

4 遺構外出土の遺物

平安時代の遺物 土師器1点、須恵器坏片1点出土している。いずれも小破片で図示できないが、おおむね9世紀代のものと思われる。

近世・近代の遺物 陶磁器 陶器1点、磁器2点（1点は碗）が出土しているが、いずれも小破片で図示できない。19世紀中ごろ（幕末期）のものと思われる。

近世以降の遺物 石臼が1点出土している。粉挽き臼の上臼部分である。小破片で2区画分に各5条のすり目が確認できるのみで、分区画数や分区画内のすり目数も確認できない。

第4章 成果と課題

個人住宅建設に伴う調査で、調査対象範囲が限られる上に、調査地内に廃土置き場を確保しなくてはならない立地であったので、28m²の発掘にとどまった。しかし、薬師堂遺跡の南端近くに平安期のものと思われる柱穴列（掘立柱建物）や、近世から近代にかけての遺構の検出ができた。

このうち、SX1は、かなり規模の大きな遺構であるが全体を検出できないこともあって性格をつかめなかつた。底部近く（7層上部）から出土した広東碗の年代が、1780年～1810年に該当することから、遺構の時期もさ

ほど大きく遡ることはないものと思われる。

S X 2 は木種の凹りを灰白色粘土で固めており液体状の物を蓄えるための造構であろう。表町遺跡での類似した造構例から肥溜と想定したが、内部の土の分析など実施しておらず確たる証拠はない。類例を待ちたい。

今回の調査を通して、さらに周辺に造構が広がることが想定される。今後の遺跡の保存に向けて大事な手がかりを得ることができた。

薬師堂遺跡付近を東山道支道が通過していたとの見解もあり（矢野1997・小出2003）、今後も注意をしていくべき遺跡である。

註

- 1 國土地理院の測量計算サイト「世界測地系座標変換（T K Y 2 J G D）」によって求めた、M 1 の北緯は36度44分40.01579秒、東経は138度13分25.54927秒になる。
- 2 陶磁器類については、長野市埋蔵文化財センター田中曉穂氏のご教示をえた。
- 3 飯綱町教育会所蔵の遺構実測図によって確認。
- 4 脱模後、長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん」を見学したところ、展示されていた中野市琵琶島遺跡出土の古墳時代前期の「クロガナ」と、この鉄製品がよく似ていた（報告書未刊。「掘るしん」のパンフレットに写真掲載）。時代は違うが、同様な用途をもつものかもしれない。

引用・参考文献

- 青木和明・遠藤惠美子 2010 『小島・柳原遺跡群水内坐一元神社遺跡（5）中領遺跡（4）』 長野市教委
飯綱町教育委員会 2004 「長野県宝永正地蔵尊」（パンフレット）
井沢信雄 1981 「考古学的環境」「前田遺跡」 卯礼村教育委員会
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
小出 章 2003 「多古駅家から沼沢駅家へ」「信濃の東山道」 長野県文化財保護協会
小松隆史 1998 『御柱尾根遺跡』 富士見町教育委員会
並澤 浩ほか 2014 「第3節中・近世の造構と遺物」「表町遺跡」 飯綱町教委
信濃教育会上水内部会 1924 「天徳の古墓」「上水内郡及長野市史料写真帖」
信濃史料刊行会 1954 『信濃史料第五卷』 P74
高田恵子ほか 1981 「前田遺跡」 卯礼村教育委員会
清水勝治 1960 「第一章黒川」「中郷村史第四編 部落の考察及人物謝恩碑」 中郷村史編纂委員会
上越市史編さん委員会 2004 「上越市史 別編2 上杉氏文書集二」 P316
田幸俊宣 1997 「銅造十一面觀音立像」「卯礼村誌 第二章 第六節」 卯礼村誌編纂委員会
中野亮一 2009 「長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 西四ツ屋遺跡 表町遺跡」 長野県埋蔵文化財センター
福原茂樹 2007 「広島・岡山地域の生産と流通」「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 中国・四國・関西編」 九州近世陶磁学会
卯礼村教育委員会 1981 『矢筒城館跡』
卯礼村教育委員会 1988 『矢筒城館跡』 第2次発掘
卯礼村教育委員会 2000 『卯礼村遺跡詳細分布調査報告書』
矢野恒雄 1997 「大字黒川」「卯礼村誌 第二章 第四節」 卯礼村誌編纂委員会
横山かよ子 2011 『矢筒城館跡VI』 飯綱町教委



調査風景（SX1）



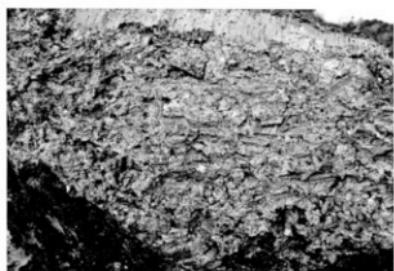
SX1、SX1(SX2の一部もみえる)、P3、P6ほか



SX2



SX2(断面)



SX2を囲む粘土（植物繊維状のものが混じる）



遺構全体（南方向より）



遺構全体（北方向より）



調査地近景（東方向より）

報告書抄録

ふりがな	やくしどういせき						
書名	薬師堂遺跡						
副書名	個人住宅建設に伴う発掘調査						
シリーズ名							
編著者	小柳 義男						
編集機関	飯綱町教育委員会						
所在地	〒389-1293 長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1 電話 026-253-2511						
発行年月日	2015(平成27年)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 世界座標系(2011)	調査期間	調査面積	調査原因
薬師堂遺跡	長野県上水内郡 飯綱町大字 黒川子薬師堂 2148番地1	78		X-82978.000 36度 44分 40秒	Y-24946.000 138度13分 25秒	2014.11.25 ~ 2014.12.02	28m ² 個人住宅 の建設

所収遺跡名	種別	主な期間	主な遺構	主な遺物	特記事項
薬師堂遺跡	集落	古代 近世・近代	ピット (獨立柱建物) 土坑 性格不明の遺構・ 肥溜状遺構	須恵器・土師器・内黒土器 磁器(肥前系広東碗等)・陶器 銅製品・寛永通宝 石硯	古代の掘立柱建物 の一部 近世以降の肥溜状 遺構

北緯及び東経は世界座標系(2011)を国土地理院の測量計算サイトを利用して求めたものである。秒の単位より小さな数値は切り捨てている。

薬師堂遺跡

個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2015年3月31日

編集発行 織姫町教育委員会
〒389-1293 長野県上水内郡
織姫町大字牟礼2795-1番地

印 刷 はおずき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
電話 026-244-0235 FAX 026-244-0210
